０６・出会って二週間、突然プレゼントをされる

本編『０５・つる系触手に縛り上げられて、乳首をねちねちマッサージされながらガチクンニでイかされる』から約二週間後。
とある年の春。
五月二十五日。二十二時ごろ。
場所はミネルヴァの屋敷内、廊下。
天気は晴れ。室温は二十三度程度。
今年はなかなか温かくならなかったが、そろそろ気候が安定してきた。

大きめの屋敷の廊下。主人公は靴で木の床を歩いている。

ＳＥ１　夜の外の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】
【０―７秒ほど流してＳＥ２】

【その後、音量が小さくなる】
【ごく小さな音量で流す】
【トラック終了まで流し続ける】

〈主人公〉
「……」

主人公、屋敷の廊下を『二人で』、ミネルヴァに会うべく歩いている。
ミネルヴァに、とあるものを見せたくて。
もう遅いというのに、どきどきわくわくして。
『彼女』と一緒に、ミネルヴァを探しているのだ。

うーん。
自室におられないという事は、やはり実験室かしら。

そう思っていると、植物のミネルヴァが天井からするすると降りてきて、その蔓の先を、ひらひらと嬉しそうに振る。

〈主人公〉
「あら」

と、見上げれば、彼女は、

『このまま、まっすぐ』

と促すように一つの方角を示す。
そのしぐさに、主人公は自然と笑顔になった。

〈主人公〉
「ありがとう」

つまり、実験室で正解らしい。
それとともに、つるが目の前まで伸びてくる。
主人公はそれをそっと撫でてキスすると、指示に従って進み始めた。
植物のミネルヴァは、この通り、いつも優しく親切だ。
控えめだがよく気が付き、用心深い。

また、すでにご存じの通り、細かい作業が得意で器用だ。
このような気質から、彼女は家の警備とものづくり全般を担当している。
これを約二週間前、主人公は彼女と初めて出会ったその日に知った。
特に警備において、彼女はとても優秀だ。
彼女の身体はとても大きく、その身を、家の外にも内にも這わせている。そうする事で外に危険がないが見張ったり、内で主人公が困ったりしてはいないかと、いつも気を配ってくれているのだ。
そして何かあると、こうして手助けしてくれる。
主人公はそんな彼女の事が大好きだし、人間のミネルヴァ以外で、初めて結ばれたミネルヴァとして、すごく意識していて……かなりよい関係を築けていると思う。
ちなみに、主人公のスタイリングを担当してくれているのも彼女だ。
毎朝起きると、彼女の選んだ服が壁にかけてあって。
主人公は顔を洗って歯を磨いたらそれに着替え、待ち構えていた彼女に髪とメイクをしてもらう。それが、朝の日課になりつつある。
彼女はとても女性らしく上品で、高級なスタイルこそが主人公にふさわしいと思ってくれているようだ。
それはちょっとくすぐったいというか、買いかぶりすぎな気はする。
なので、さすがに出会った日に着たドレスのような華美なものを提案された時は遠慮し

ているが……主人公は彼女のセンスが大好きだ。
彼女のおかげで主人公は劇的におしゃれになり、とても『女の子』としての生活を謳歌できるようになっているのだ。

そうして歩き続けていくと、今度は石のミネルヴァが、曲がり角からひょこっと顔を出す。
それからお姫様抱っこをするような手ぶりで、
『そこまでお運びしましょうか』
と提案してきた。
だから主人公は嬉しくて、今度は声を出して笑った。
〈主人公〉
「ふふ、ありがとう。自分で歩くから大丈夫よ」
この通り石のミネルヴァは、少々過保護気味な一面がある。
彼女はいわゆる『ゴーレム』だ。見た目こそ、武骨で近寄りがたい。

実際、家に何かあった時の主な戦闘員は彼女らしく、主人公は彼女が薪割りをしたり、重い物を運んだりしている所くらいしか見た事がないが……その力には凄まじいものがあり、ほとんどの人間は太刀打ちできないのだという。

その一方で、内面はとても奥ゆかしく献身的だ。

この家の家事全般を担っているのは彼女で、主人公がここに来た初日も、顔こそ見せる事はなかったが……やつれた主人公にご飯を作ってくれたのは、石の彼女だったのだ。

これを思うと、主人公の心はいつも温かくなる。あの日食べさせてもらったクリームシチューの味が、ますます心にしみるようだ。

そんな人柄の彼女は、どこまでも主人公に尽くしてくれる。

彼女は業務中助手として主人公の手伝いをしてくれる事も多く、そのお礼として主人公は彼女と一緒に料理したり、洗濯や掃除をしたりする。身体の形が人間に近いのもあって、彼女とはまるで同僚のようなコミュニケーションがとれているのだ。

また、彼女は四人の中で唯一自分からは主人公と関係を結ばず、主人公に触れる事を、最後までとても恐れていた存在でもあった。

そして、その関係に変化が生じた今でも、とても慎重に、丁重に扱ってくれている。

主人公はそんな、壊れ物を扱うように大切に愛してくれる彼女の事が大好きだ。
いつも主人公を喜ばせよう、あるいは楽をさせようと、自分が代わりにできそうな事は、全部やろうとしてくれる彼女に、積極的に気持ちを伝えたいと思っている。

〈主人公〉
「愛してるわ」

だから主人公は遠慮しつつもとても幸せな気分になって、その大きな身体にぎゅっと抱きついた後、右胸に頬をぴったりとつけて甘えてみた。
ゴーレムの彼女は、その名称からイメージされる通り、かなりの巨体だ。
ゆえに主人公との身長差は、少々激しい。平均的な身長の主人公では、いくら背伸びをしても、ここまでしか届かないのだ。

その間もずっと、液体のミネルヴァは音も立てず主人公に帯同している。
一見透明の液体のようで、その硬さや大きさをある程度自分で変える力を持つ『スライム』の彼女は、仕事が忙しいくせに、とにかく主人公のそばにいたがる。
この通り、隙を見つけては現れて、くっついているのである。
彼女は他の二人に比べ、随分原始的な性格というか、欲望に忠実な存在だ。

役割もシンプルで、備蓄と洗浄を担当している。
彼女は光や土、あとは動物と同じように食事からエネルギーを集め、それらを、栄養の詰まった液体として体内に保存する。そうしてこの家の緊急時に備えるのだ。
また、ものすごくきれい好きらしい。
本人が見せたがらないので、主人公は洗浄作業の現場を見た事はない。
だが、人間のミネルヴァ曰く、彼女はこの家で最も清潔な存在であり、その能力は、複雑な調合には不可欠なのだという。

つまり液体の彼女は、主人公には理解不能の超高能力を持つ、神秘の存在だ。
神秘の存在なのだが……その栄養の塊のような彼女と、二週間前の、疲労困憊の擬人化のような主人公が出会った時、一体何が起こったのか。
まぁ、おおむねご想像がつくだろうが、それは後述しようと思う。
その他の日常の様々な点においても、こちらの彼女は愛情表現が少々激しすぎて、時に困ってしまう事もしばしばだ。
だが、こうも必要とされると、やはり嬉しいものである。
ゆえに主人公は、彼女にいつ何をされても、おおむね許していた。
……具体的にこれまで何を許してきたのかと言えば『おおむね』の範囲が広すぎると指摘を受けそうなところではあるが、まぁ、それも後述するとして。

そんな液体の彼女は今、他の二人を見て嫉妬心が疼いたのだろう。

『撫でて』

と言わんばかりに、ちょうど手を置きやすい高さまで伸びてくる。

〈主人公〉
「はいはい」

その頭――に、本人が模しているだろう部分――をぽんぽんと撫でながら、主人公は『四人で』先へ進んだ。

こうしてにぎやかな一行は、いよいよ実験室にたどり着く。

主人公がこの屋敷に来て二週間。

主人公とミネルヴァの関係はいよいよ深まり、主人公は、人間の姿以外の彼女ともすっかり親しくなっていた。

SE2　主人公の足音1
【最初から最後まで流す】

【０―８秒ほど流して次の『ミネルヴァ』のセリフ】

▲　ボイス加工あり

【木のドア越しに聞こえる】

【３メートルほど遠くで聞こえる】

【主人公がドアに近づく事で、フェードインするように聞こえ始める】

【小さめの音量で流す】

●正面　３０センチ

「【通信の相手に話しかけている。

真剣かつ丁寧でありつつ、少し安心した様子で。

聞き手が明らかに『仕事相手と話しているようだ』と感じるような雰囲気で。

ミネルヴァは今、とある人物と、確認の連絡を取っている。

その結果、相手方から良い返事が聞けたので、かなり安堵している。

ミネルヴァは主人公が近づいている事に、他の自分を介してすでに気づいている。

だが『もうこの会話なら聞かれて問題ないだろう』と判断して、そのまま続けている】

……わかりました。

では、そのようにお手続きを進めて下さい。

二十七日に、お送りして。

……二十八日に、本人を向かわせますから」

SE3　主人公がドアをノックする音
【最初から最後まで流す】

主人公、ドアをノックすると、三人のミネルヴァとくすくす笑いながら、応答を待つ。中の様子はわからない。だが人間のミネルヴァも、きっと主人公の訪問を受け入れてくれるはずだ。
その間も植物のミネルヴァは主人公の髪を一房すくって、くるくると自身に絡めてはその感触を楽しんでいて。
液体のミネルヴァは胸に抱かれたがって登って来て、石のミネルヴァはぴたりと背中に寄り添ってきたが……主人公はそれらすべてを自然に受け入れ、愛していた。
……彼女たちのすべてを、好きになっているからだ。

▲　ボイス加工あり
【木のドア越しに聞こえる】
【3メートルほど遠くで聞こえる】
【ドア越しである事以外、もう概ね距離に適した音量で聞こえる】

●正面　３０センチ
「【通信の相手に話しかけている。
真剣かつ丁寧に。
ちょっと緊張した様子で。
聞き手が明らかに『仕事相手と話しているようだ』と感じるような雰囲気で】
はい、ありがとうございます。それでは」

ここで通信が切れる。
しかし、ドア越しなので、通信を切る音は、主人公からは聞こえない。

▲　ボイス加工あり
【木のドア越しに聞こえる】
【３メートルほど遠くで聞こえる】
【ドア越しである事以外、もう概ね距離に適した音量で聞こえる】
●正面　３０センチ
「【ここからはすべて、主人公に話しかけている。
穏やかに優しく。
以後、時間経過を少しわかりやすく『本編０５までよりも、明らかに親しくなっている』

という感じで。
優しく愛情に満ちていて、明確に声が柔らかくなった感じで。
聞き手が『あれっ？　ミネルヴァってこんなに優しくて、大人っぽい感じだったっけ…？』と、ドキドキさせる感じで】
……どうぞ？」

〈主人公〉
「！」

すると、返事があった。
主人公は植物、石、液体のミネルヴァと顔を見合わせると、ドアハンドルを握り、扉を開ける。
それとともに三人の彼女たちはそっと散り散りになり、それぞれ自分のテリトリーに帰っていった。
先程の説明からすると、液体まで去って行ったのは少々意外に感じられるかもしれない。
だが、彼女はそういうところがある。今回も『ここからは人間の自分に譲ってやろう』という事なのかもしれない。

SE4　主人公がドアを開ける音
【最初から最後まで流す】

SE5　主人公がドアを閉める音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「……ごめんなさい、通信中だったのね」

しかし、いざ人間のミネルヴァと対峙すると、主人公は途端にどぎまぎしてしまって、うまく話せなくなる。
あちらの彼女たちには、あんなにも素直になれて。
『愛してる』と日常的に言うし、あんな事とか、こんな事とか。はたまた、そんな事までもを、当たり前のようにさせているのに。
近頃どうも……人間の方を相手にすると、妙に緊張して。言葉が出てこなくなるのだ。

SE6　主人公の足音2
【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】
【0―3秒ほど流して次の『ミネルヴァ』のセリフ】
【▲1　でストップする】
▲　ボイス加工あり
【1．5メートルほど遠くで聞こえる】
●正面　50センチ
「【穏やかにとても優しく。
トラック05までよりも、明らかに感情がある。
『主人公の事が、可愛くて仕方がない』という感じの声で】
大丈夫よ。もう終わった所だから」

〈主人公〉
「もしかして、来週の学会の話？」

主人公、ミネルヴァの優しい声にホッとしながら、彼女の傍まで向かっていく。
勢いに任せてここまで来たはいいが、まさか、こんな遅い時間まで通信するほど忙しいとは。
……もしかすると、仕事の邪魔をしてしまったかもしれない。

▲　ボイス加工あり
【1メートルほど遠くで聞こえる】
●正面　50センチ
「【穏やかに優しく。
さらりと嘘をつく。
ミネルヴァはこの二週間で、随分と人間としての情緒が育った。
主人公に情操教育されたのである。
その結果『主人公に言えない事がある時は、嘘をつくのも致し方ない』という知恵まで得たので。
それゆえに内心では罪悪感でいっぱいだが、これは今後の二人にとって必要な事だと思う事で、耐えている】
……そう。
四日後……二十九日からの学会の件で、担当の方とお話していたの」
〈主人公〉
「あら」

そう。
住み込みで働かせてもらってわかった事だが……ミネルヴァという女性は、とにかく多忙なのだ。

主人公やクロエを含む町の人々にとって、ミネルヴァは『郊外に住む、引きこもり気味の魔女』『無口で人とコミュニケーションを取りたがらない、偏屈な人物』という印象を持たれている。

だが実際は、どうやら家から出る間もないくらい様々な仕事があるから、事実上の引きこもりと化しているだけで。
付き合いづらい人、人と関わる事が苦手な女性と評されながらも『それでも』と頼りにする人に囲まれているようなのだ。
そこで相手方が『ミネルヴァが集中できるように、可能な限り訪問タイミングを絞る』『むろん、どこそこに所属してその場所で働いてくれ、等も言わない』『かつ、不要なやり取りを避ける事でミネルヴァの負担を最小限に減らす』と配慮する形で、ミネルヴァは日々多くの取引先と働いているらしい……という事を、主人公は最初の一週間で理解した。
要するにミネルヴァは、とても多くの人に必要とされている。

本来なら十何時間も主人公にのみ費やして、ぶっ通しでセックスする暇のあるような人間ではないのだ。

▲1　ここでＳＥ６がストップする。

●正面　５０センチ

「【※息遣いのみ※　で表現する。

『はぁ～、どっと疲れたわ……』という感じのため息をつく。

聞き手を一度ドキッとさせた後、本編０４の時のような頼りないミネルヴァに戻る事で『あ、やっぱりいつものミネルヴァだった』と安心させるイメージで】

……はぁ。

【へなへなと力が抜けた感じで。

通信の件について話す。

『そんなに大変な仕事ではないのに、こんなに時間をかけてしまった自分が情けないわ……。主人公さんに格好いいところをお見せしたいのに』とシュンとしている感じで。

『自分から通信する』という、自分にとっての大仕事に対する苦労を語りつつ『とても緊張する事をしたから、もう、主人公さんに甘えたいわ』という感じで。

ここからは通常通り、思っている事をそのまま話す。

また、ミネルヴァのこういう性質が取引先の『できるだけやり取りを避けてあげよう。貴重な彼女の時間を、ものすごく奪ってしまうから』という配慮に繋がっている。
しかし、最近、というかここ二週間ほどは、ミネルヴァは人類とのコミュニケーションを非常に頑張っていた。
むろんそれは、主人公に格好いいところを見せたいからである。
つまり最近非常に忙しいのは、故意に仕事を増やしたからだ。
勿論それは周囲に必要とされているからできる事だが、単なるミネルヴァの見栄でもある。
しかし、主人公がそのあたりを誤解して『こんなに忙しくて周囲に必要とされている方と自分は、まるで釣り合わないのではないかしら』と気後れしている事には全く気付いていない。そこまで想像力が及ばないのだ】
知らない方とお話しするのは緊張するわね。
怖くて怖くて、通信機を持ってからかけるまで、十分以上かかってしまったの……」

〈主人公〉
「あははっ❤
だったら一言おっしゃればいいのに。
わたしが代わりにかけて差し上げるわ」

主人公、絵に描いたような『ホッと胸をなでおろすポーズ』をするミネルヴァの肩に、笑いながら触れつつ、

……よかった。いつものミネルヴァだわ。

正直、こういうちょっと頼りないミネルヴァって、実は結構好きというか。安心するというか。

可愛いなぁ、って思っているのよね。

というか……。

わたしが倒れた、二週間前のあの時は。

通信が苦手なのに、あんなに急いでクロエに連絡してくれたのね……。

と、思わず胸がきゅーんとしてしまう。

それから、

――ところで、通信がらみの業務位、全部わたしにお任せしてくれたっていいのに。

ミネルヴァって、一人で仕事していた時間が長すぎるのか、基本的に、なんでも全部自分でやろうとするし。わたしの事も、ちょっと甘やかしすぎで、あんまり難しい事もさせ

てくれないのよね。
そういう性質は、石の彼女にそっくりというか。
……いいえ、逆ね。
人間のミネルヴァがこの調子だから、その性質が石の彼女にも強く現れているのだわ。

とも思う。
ミネルヴァはいつも涼しい顔をしているから、わかりにくい。
だが、彼女の暮らしは単純に激務で、とても一人でこなせるようなものではないのだ。
それでも『貴方が来て、ずいぶん楽になったわ』と言うものだから、主人公は照れてしまうが……実際には、主人公が手伝える事はあまりにも少ない。
簡単な調合以外にできる事は事務仕事ばかりで『アカデミーの優等生と呼ばれていたって、社会に出ればこんなものね』と痛感せざるを得ない現状なのである。

だから主人公は、ミネルヴァの淡々としながらも丁寧で、決して疲れを見せない働きぶりを間近で見るうち。
ますます彼女を支えたい、役に立ちたいという気持ちが強くなるとともに、ますます彼女を好きになってしまった。
もし面接の日、自分が奇病に冒されておらず、通常通りに就職したとしても。

自分はきっと彼女に恋しただろう。世のため人のために尽くすその背中を支えたいと、きっと強く願っていた事だろう……。
そう思うほど、仕事に打ち込むミネルヴァは魅力的で。
だから、こんな自分は彼女の足を引っ張ってはいまいか。
そもそも自分は、こんな凄い人にため口を利ける存在なのだろうか……。
と不安になっていると。
不意打ちでキスをされたり、それ以上の事をされたり。

『……こんな事をしていてもいいの？』

とたしなめても、

『いいの』

と即答で。ぐずぐずになるまで、いよいよ石のミネルヴァに運んでもらわないと駄目になるまで抱かれたりして。
そんな二週間を過ごしてしまったものだから、最近の主人公はミネルヴァとうまく話せない。

二週間前までよりも、ずっとずっと彼女を好きになってしまったし……二週間前までと何も変わらず、自分だけが彼女に振り回されて、一方的に恋しているような気持ちがぬぐえないからだ。

●正面　５０センチ

「【ちょっとヘナヘナしつつも、気丈に。
主人公の申し出を断る。
いくら通信が苦手と言えど、主人公の前では、可能な限り格好つけたいので。
また、今後この弱点も克服していきたいので。
また『いつも忙しそう感を出している割には、通信が苦手すぎる。不自然だ』という矛盾をつかれ『主人公にいいところを見せるために、突然、無理に仕事を増やしまくった結果、こうなった』という実態がバレないか心配している。
また、そもそも今回の通信は、主人公には絶対に聞かせられないものなので】
ありがとう。でも、そういう訳にはいかないわ。
自分の事ですもの。自分で頑張らないと……。
【穏やかに優しく。
話題を変える。
もっと気になる事があるので】

それより、いかがなさったの？
そんなに急いでいらしたという事は、何か私に伝えたい事があるのではなくて？」

〈主人公〉
「……あぁ……」

そんな事情なので、現在の主人公には、ミネルヴァに伝えたい事、聞きたい事がたくさんある。
しかしどれをいつ、彼女に伝える、あるいは尋ねるか。それが問題だ。
たとえば、彼女の事を雇用主としてではなくて、一人の女性として好きになってしまった事を、いつ伝えるべきかとか。
先日以来、時折『好き』『大好き』と言ってもらえるようにはなったが、それは彼女にとってどういう意味を持つのかという事を、どう尋ねるか……などだ。

〈主人公〉
「……あー。
……えっと、ね？　えーっと……」

だから、主人公は思う。

――そう。そうなのよ。

確かにあの時……初めて植物のミネルヴァと出会った日。

『貴方の事が好きみたい』とはおっしゃっていただけたのだけれど。

それ以降も『好き』と言ってもらえるようにはなったし、わたしもこう、どさくさにまぎれて時々、想いを伝えるようにはなったのだけれど。

ミネルヴァの『好き』って、どうも軽い印象があるというか……。

『研究が好き』とか『三時のおやつが好き』とか。

『きらびやかな装飾品が好き』とか『晴れた日の朝が好き』とか。

そういったのと同じように感じられてしまって。また、わたしの『好き』さえ、それと同じ雰囲気で受け止められているような気がして。

どうも、もう一歩踏み込む勇気が出せないのよね……。

……勿論、勿論よ？

仮に、ミネルヴァの『好き』に深い意味がなかったとしても。また、わたしの『好き』を正しく受け止めていただけていなかったとしても。

好きだと思うものの中にわたしを並べていただける事は、とても光栄な事だと思っているの。

それは同じ家で一緒に暮らして、働く者として。好感を抱いていただけているという事なのだから。

……でも。

ミネルヴァの思う好きはわたしの『好き』とは違うのではないかと思うと、どうしても……どうしても悲しくなって。さらに踏み出す勇気が持てなくなってしまうのよ。

と。

●正面　５０センチ

「【穏やかに優しく、続きを促す。

ミネルヴァとしては『なあに？　何のお話？　貴方のお話なら、何でも聞きたいわ。聞かせて！　早く知りたいわ！』といったハイテンションなのだが、主人公と聞き手には『最近のミネルヴァ、なんか余裕があってドキドキする……。なんだか素敵な優しいお姉さんに見える……』と感じさせるイメージで】

ええ。勿論聞くわ。なあに？」

だがミネルヴァは例のごとく、主人公の胸に秘めた思いなど気づくはずもない。

もう、嫌と言うほど実感しただろう。

ミネルヴァという女性は、すべてを見聞きした通り、額面通りに受け止める人物だ。
主人公がはっきり動かない限り、現状の『好きと言われ、言い、四種の姿をした彼女と毎日、ちょっとどうかと思うほどにまぐわっているが、交際しているかどうかはいまだ不明』という、あまりにも複雑な関係が進展しない事など明白なのだ。
でも主人公は、なかなか先に進めない。
それどころか、

……あぁ、この『勿論聞くわ』って台詞、以前にも聞いた事があるわ。
ミネルヴァは、初めてお話した時もこうやって、わたしの話を真剣に聞いてくださったのよね。
肝心の話の内容は一部において最悪すぎて、もう、一刻も早く忘れていただきたいところなのだけれど……。
あの時も、嬉しかった。
出会ったばかりのわたしの事を、少しでも理解しようとしてくれる、不器用な優しさが伝わってきたから。
あぁ。好き……。

などと、目の前のミネルヴァがいつも優しい事に甘えて、つい思い出に逃げてしまうの

である。

〈主人公〉

「……実は、その。あなたに見て欲しいものがあるのだけれど……」

だが主人公だって、何の手も打っていないわけではない。

主人公は両手に抱えていた紙の束を見せると、どきまぎと切り出す。

恋愛対象として見てもらう方向性ではなかなか進展できなくとも、助手として頼れる人間になるという方向性では、積極的に打ち出していきたい。

そう考えているのである。

●正面　５０センチ

「【穏やかに優しく、続きを促す。

ミネルヴァとしては『なあに？　何のお話？　貴方のお話なら、何でも聞きたいわ。聞かせて！　早く知りたいわ！』といったハイテンションなのだが、主人公と聞き手には『最近のミネルヴァ、なんか余裕があってドキドキする……。なんだか素敵な優しいお姉さんに見える……』と感じさせるイメージで】

うん？　見せて頂戴」

〈主人公〉
「こちら。ちょっとした、改善案。なのだけれど」

ＳＥ７　主人公が紙束を差し出す音
【最初から最後まで流す】

ＳＥ８　ミネルヴァが紙束をめくる音
【最初から最後まで流す】

●正面　５０センチ
「【穏やかに優しく。
まずは見出しだけを見て言っている。
研究がらみの話題で来るのは少々意外だったが、研究の話ができるのはとても嬉しい。
内心とてもワクワクしているが、以下省略……である】
薬草の抽出法の改善案？」
しかし、結局ドキドキするのに変わりはない。

むしろ、恋愛的なアプローチをするよりも、よほど茨の道を進んでしまったような気もする。

何せミネルヴァはプロフェッショナル、その上天才肌タイプだ。

主人公なりの決死の工夫と努力も『この方法なら、すでに思いついていたわ』『でも○○や××のような理由や観点から、採用には至らなかったの』くらい、いつもの調子であっさり言われてしまいそうである。

●正面　５０センチ

「【少々驚いた様子で。

ミネルヴァ自身『なるほど。こういった方法があったのね』と素直に感心する内容だったので。

基本的な所から一つずつ丁寧に洗って、ようやくたどり着けるタイプの結論が、そこに示されていたので。

それを『主人公さんらしい』と思うとともに『たとえ主人公さんの発案でなくとも、私はこれに強い関心を持って、尊敬の念を抱いたでしょう』と思っているので】

……これは、貴方がお考えになったの？」

〈主人公〉

「……ええ。……そうよ。
基本は、あなたの論文が基になっているから。
わたしが加えたのは、ちょっとした工夫程度なのだけれど……。
それでも、もし抽出法をこの方法に変えたら、もっと早く、正確に高品質のものが採れるのではないかって思っているの。
……まぁ、それだけの、些細な提案なのだけれど……」

だから主人公は、言いながら、どんどん自信がなくなってきた。
らしくもなくもごもごと話し、声まで小さくなってしまう。
そして思う。

――そういえば、今思い出したけど、以前クロエにも釘を刺された気がするわ。
『あなたは年上の、知的な人にとにかく弱いんだよね。そういう人が言う事や、する事はみぃんな格好よく見えて、なんか気後れしちゃうもんね』『社会的立場が上の人だともっとダメ……。だから国研の所長なんかが素敵に見えちゃったんだもん』
そう……そんな事を言われた。
うーん、的確過ぎる……今がまさにそうだもの。
つまりこのような傾向があるわたしは、初日の『ちょっとダメなところもあるけど、仕

事熱心でとても優しい人』のミネルヴァとは普通に話せても。
今の『毎日休む間もなく仕事に打ち込んでて、社会的にも重要な立場にいる人』のミネルヴァを知ってしまってからは、なんだか以前のように話せなくなってしまっているのでしょうね。

と。

●正面　５０センチ
「【穏やかだが、ちょっと前のめりで熱っぽく。
ほんのわずかに早口になる。
内心大興奮しながら、主人公の提案に是非のりたい旨を述べる。
『すごいわ！　流石は私のお嫁さん！　研究を見てあげる時間も、手順を教えてあげる時間もないのに、たったお一人でこの結論にたどり着くなんて、なんて素晴らしいの』と思っている。
そう、自分たちの関係に対する、主人公とミネルヴァの認識は、またも大きくずれている。
ミネルヴァは先日『貴方が好き』と告白した事で、自分たちは交際を始めた。というかもう、婚約したようなものだと思っているのである。

そう思う主な根拠は、人間以外の三種の自分を、ミネルヴァが何も言わずとも主人公が積極的に受け入れ、良好な関係を築いている事に起因する。

その一方で、四人の自分の一方的かつ全力の求愛を主人公が受け止め続けざるを得ず、セックス漬けの日々になっている事を申し訳なくも思っている。

その上、見栄を張って仕事を詰め込んでしまったから、主人公が手すきの時に石の自分と進めているらしい自身の研究について、ろくに見てあげていられていない事も申し訳ない。

つまりミネルヴァはミネルヴァで現状に気をもんでいて『自分ばかりいい思いをして、奥さんに不満や不安を抱かせているのではないかしら。早急に改善しないと』と考えているのだ。

だが、主人公には何一つ伝わっていない。本当に何一つ伝わっていないのである】

いいえ。些細な発見などではないわ。

よく考えたわね。私にはない発想だわ……。

工程も、可能な限り無駄を省けるよう、きちんと練られてる。

【ここでふと、申し訳なさそうに。

ミネルヴァは、主人公を助手として採ったはいいものの、ここまで主人公が優秀な事は想定していなかった。

そのため、主人公の実力に見合う仕事をなかなか与えられない事、主人公が本来してき

た研究をじっくり見てあげる暇がなかなかない事を、とても申し訳なく思っているので】
いつも簡単なお仕事ばかりで、貴方の研究の事はあまり見てあげられてないのに……凄いわ。
【さらに一段階前のめりに、熱っぽく。
早くこれを試してみたくてたまらないので】
ねぇ、私も実際に抽出する様子が見たいわ。
明日にでも、早速一緒にやってみましょうよ」

〈主人公〉
「あっ……。
も、もちろんよくってよ。
あなたのお時間のある時に、ぜひ実演させていただければと思っていたの」

しかし、予想に反し、ミネルヴァは優しかった。
主人公としては、特段大したものでもない、ただミネルヴァに少しでも認めてほしくて、褒められたくてしただけの些細な研究結果を、こうも肯定的に受け止めてくれる。
まさか、こうも温かい言葉をくれるとは思っていなかった。
内容がよかろうと悪かろうと、ミネルヴァはもっと忌憚なく、もっと歯に衣着せず。さ

らりとこの件を済ますのではないかと思っていたからだ。
でも、違った。
実際のミネルヴァは、主人公の想像するミネルヴァよりも、ずっと主人公の事を気にかけてくれていて。
……そして、評価していてくれる、気がする。

●正面　５０センチ
「【きゃっきゃと子どものように。
穏やかだが、ちょっと前のめりで熱っぽく。
内心大興奮しながら、明日を楽しみにする旨を伝える】
本当？　楽しみだわ。
【とても嬉しそうに。
少女のように無邪気に、心から主人公を褒める。
まるでどちらが上の立場の人間だか、わからなくなるような感じで】
ふふ。凄い。
貴方って、本当に優秀でいらっしゃるのね」

〈主人公〉

「……❤」

もしかすると主人公はミネルヴァの事を勝手に、何だか怖く大きなものに捉えていただけなのかもしれない。

主人公はミネルヴァの仕事ぶりに気圧されてすっかり自信を無くし、研究者としても、女性としても、自分とはまるで釣り合わない存在なのではないかと思い落ち込んでいた。

だが、実際の彼女はずっと、出会った日と何も変わらなくて。少し勇気を出せば、こうして応えてくれる。

自分の事を、こんなにも褒めてくれる存在だったのだ。

そう思うと、心の奥がきゅーんと疼く。

今すぐキスして、抱きつきたいという衝動が、一気にこの身をめぐり始める。

〈主人公〉

「ありがとう……！

……あ。でも、やっぱり基本はあなたが考えたものだから。

わたしは大した事をしていないと思うわ。

実質的にはあなたの功績よ」

●正面　５０センチ

「【きょとんとして。

心底不思議そうに。

『主人公さんの言っている事が、よくわからないわ』という感じで。

まず、ミネルヴァは主人公の発言を、謙遜だと思っていない。

謙遜の概念を知らないのではなく『謙遜する必要が一切ないくらいの仕事を、主人公さんはされた。だから、謙遜などされないはず』と思っているので。

思った事を素直に述べる】

あら……。何を仰るの。

この抽出法は、貴方の功績よ。

貴方は『私の論文を参考にしたから、自分の研究とは言えない』と仰るけど。

私も、過去の文献を礎（いしずえ）にして自分の研究をしている。

だから、これはやっぱり、貴方がお作りになった物よ」

〈主人公〉

「そう、かしら……？」

それでも尚もじもじする主人公を、ミネルヴァが力強く励ます。

彼女がこうもきっぱり言い切るのは珍しい気がして、主人公はときめき、身体の中心が熱く燃えるような気がする。
だけど、よく考えればそれは自然な事のようにも思える。
胸はこの通り激しく鼓動しているし、そもそも今、お腹は物理的に熱い。
――そう。お腹だ。
なぜ今、そんなものが熱くなっているのかというと……。

●正面　５０センチ
「【にっこりと優しく。
だがきっぱりと断言する。心からそう思っているので。
この通り、いつも通りただ思っている事を話しているだけなのだが、やはり聞き手と主人公には『なんだか余裕があってかっこいいし、励ましてくれてすごく素敵……！』に見える】
そうよ。自信をお持ちになってね。
【にっこりと優しく。
しかし、ここで急に気持ちが曇る。
『元々国研に入れる程の人物』がなぜこのような小さな研究所で、まるで光の当たらない仕事をしているのか。そうなった理由を、ミネルヴァは知っているので。

また最近のニュースで、さらなる国研元所長の悪行を知り『もしかすると主人公さんは元所長の金銭がらみの不正ではなく、別の件。男性職員への性的嫌がらせを許せなくて立ち上がったのではないかしら』と感じる事があったので。

この二週間、ミネルヴァはこれまでの人生にない位想像力を駆使して、主人公の事を考えている。

だから、その発想に至った。

仮にもし、自分の推測が当たっているなら。主人公が性的嫌がらせをやめさせるために行動し、その結果退職する事になったのなら。

『私が今主人公さんにしている事は何なのかしら』と思う。

ミネルヴァは主人公との行為を『恋愛感情を伴う、合意の行動』だと思ってはいる。というか、ふうふの営みだ……と捉えてはいる。

だが、それは人間の自分に限った話だ。

自分から紹介したとはいえ、まさか残り三種の自分がここまで主人公を気に入るとは思っていなかったし、自分からは一切性的な行為をしない石の自分と、おとなしい性格で、性行為よりも主人公を着飾ったり、美しくしたりする事の方が好きな植物の自分はまだしも。

はっきり言って、液体の自分が抱える欲求の濃度は普通ではない、あれを受け止め続けるのは並大抵の事ではない、と思っている。

ミネルヴァの感情に最も影響されやすく、それを単純化して出力するのが液体の自分だからだ。
だからもし主人公がただ『断れないから』『他に行くところがないから』、三人の……いや、四人の自分たちからの行為を受け入れているのなら。
『自分は、元所長と何も変わらないのでないか』とすら思うのだ。
主人公と他の自分は一見とても仲がよさそうで、幸せそうに見える。
自分自身としている時だって……喜んでくれているとは思う。
だが、本当のところはわからない。主人公に直接尋ねたわけではないし、尋ねたところで、本音が聞けるかはわからないからだ。
ミネルヴァは、主人公が何を考えているのかわからない。一度も拒まれた事がない事実が、逆に不安を加速させる。
だから必死に想像して、推測しようとしている。だが、いかんせん経験が少なく、アプローチも足りず、確証に至れずにいる】
貴方は元々、国研に入れる程の方なのですから」

〈主人公〉
「……っ……。
ありがとう……！」

そう……そうなのだ。
どうして今、主人公の内側がこんなに熱いのかというと。
……ついさっき、液体のミネルヴァと、めちゃくちゃに交わったからだ。
液体の彼女が持つ、栄養の塊。乳白色のどろどろを……今も溢れて垂れてきそうなくらいたっぷりと、膣内に注ぎ込まれたからだ。

――ここで先程の『後述』に入ろう。
すでにお話しした通り、液体のミネルヴァは備蓄庫だ。
体内にエネルギーを貯め込んでいる。
だが、それは基本的には非常用であり、『よっぽど弱っている生き物』が近くにいない限りは貯蔵を続け、栄養の質を上げるように命じられているらしい。
だが、液体のミネルヴァに初めて出会った時、主人公は弱っていた。
疫病から回復し、精神的に落ち着いても、肉体は完全に元に戻ったわけではなかった。
一見元気に暮らしているようでも、髪とか肌とか、爪とか唇には、まだ疲労が残っていて。
今思えばおしゃれに食指が動かなかったのも『こんな身体では』という気持ちが、心のどこかにあったからだと思う。

そんな、ここへきて数日目の夜。
自室で眠っていたら、液体の彼女が入って来た。
そして、ベッドまで登ってくると、口に模した部分からそっと分け与える形で、栄養をくれたのだ。

その時主人公と液体のミネルヴァは、すでに顔見知りではあった。
ただ、彼女は当時とても人見知りで、思うようにコミュニケーションは取れていないように主人公は感じていた。『仲良くなるには、相応の時間がかかるだろう』。そう解釈していたのだ。
そんな彼女が、進んでこのような事をしてくれた。
主人公はそれがとても嬉しかったし……これを機に、もっとよい関係になれたらと思った。
だから、長く静かなキスをして、ゆっくりと口移しで体液を飲ませてもらった後。
そのまま出ていこうとする彼女を、主人公は引き留めた。
『……もう少しだけ、一緒にいてくださらない？』

それが、生まれて初めて自分からセックスに誘った時の言葉になった。

これがきっかけで主人公と液体のミネルヴァは結ばれ、夜が明ける頃には、事態を知ったミネルヴァに『わたしの方からお誘いしたの』と説明しないと、絶対に誤解を受けそうなほどの……濃厚な行為を終えた後だった。

主人公には、四人のミネルヴァがどの程度意識や経験を共有し、命令し合っているのかはよくわからない。

ただひとつわかるのは、初めて液体の彼女が触れてきたとき、彼女は既に、主人公がして欲しいと願うセックスを理解していたという事だ。

はじめは、どのようにそれを表現するべきか、どう実現するべきかと悩んでいたようだった。

だが、主人公が抱きしめたり、キスしたり、身体を撫でさすったりするうちに、少しずつ自信をつけていって。やがて、初めて人間のミネルヴァがそうしてくれた日のように、主人公の中に入って来た。

それから先は、なだれ込むような激しい感情の波と、深く……そう、彼女の持つ栄養のごとく、稠密（ちゅうみつ）な快楽に襲われた。

彼女は長年ずっと持て余してきたような強い欲望を、少しずつ、だが次第にくっきりと主人公にぶつけてきて。

その度に主人公は驚き、戸惑いながらも、応えたくてすべて受け止めた。

触れ合う喜びを知った彼女の事を『獣のようだ』と解釈するのは簡単だったが、それ以上に、あまりにも繊細で切ない熱を感じたからだ。

彼女には、抑え難いものを抱えているくせに、それを今すぐにでも吐き出したいと願っているくせに。こちらの望みを必死でなぞろうとするような、健気さと聡明さがあった。

思いつく事はすべて試したいという乱暴な衝動がありながら、主人公が明らかな不安や困惑の色を示すとすぐにやめ、謝罪し、非礼を埋め合わせようとする、不器用な誠実さがみてとれた。

だから主人公は、彼女が申し訳なさそうにするたび、

『大丈夫。大丈夫よ』

と、何度もささやいて、身体を撫で、優しく励ました。

その度に少しずつ距離が縮まっていくのを感じ、また、彼女が大胆になっていくのを肌で理解した。そして、それを繰り返しながら……数日前、人間とミネルヴァとそうしたように、朝まで何度も、何度も抱かれたのだ。

それは人間のミネルヴァの時とも、植物のミネルヴァの時とも違う体験だった。
三人は確かに同じ存在だが、違う身体を持ち、また、表に出る気質もそれぞれ違っている。
だから主人公はこの夜を、これまで知らなかったミネルヴァの違う側面を感じとり、もっと深く理解するきっかけとなった時間と捉え、ますます彼女への想いを強めたのだった。
こうして次の日から主人公は液体のミネルヴァとも愛し合うようになり、今日に至るというわけだ。
正直な所、頻度で言えば、四人の中で、だんとつに多いと思うほど、好きにさせ……気持ちよくされていると思う。
この現状を、主人公は、次のように言い訳する。

……確かにこの回数と頻度は、どう考えてもふつうじゃないかもしれないとわかっているわ。
でもこれは、最初にお誘いした方。つまりわたしが始めた事というか。そうである以上は受け止める責任も、その意思もあるというか。
まぁ。まさかここまでわたしとの行為をお気に召すとは思わなくて、正直、驚いてはいるのだけれど。

とても、嬉しいし……。

だってね？

彼女と愛し合っていると『口では『仕方ないわね』と言いながら、何もかも全部許してあげる』っていう、我ながらよくわからない欲求がものすごく満たされて、嬉しいの。持て余しに余した母性本能のようなものが、彼女をもっと甘えさせてあげたい、彼女の好きなようにさせてあげたいと叫ぶの。

それから、四人のミネルヴァの中ではもっとも年少で。多分、わたしよりも年下だろう彼女のむき出しの情熱を受け止めるのは、うまく説明ができないのだけれど、なんだかすごく女性として認められているような気がして、幸せだし……。

あと、彼女のおかげでわたしの身体はすっかり元気になってしまって。

髪も肌も爪も唇もこれまでにないくらい、つやつや、うるうる、ぴかぴか、ぷるぷるって感じなのだけれど、それ目的だと誤解されてはいけないから。その分、毎回の行為にも熱が入るというか……。

――取り繕っていても仕方ない。もう、正直に言うわ。

彼女は他のミネルヴァたちよりも独占欲が強くて、愛情表現が下手で、何もかもが不慣

れで。でも、それが可愛くて好きなの。わたしはそれを受け止めたいの。
彼女はわたしを自分のものにしたがって、いつも、支配的で一方的な絵面を好むくせに。
行為には一切の苦痛がないどころか、あまりにも的確で、絶妙な、気持ちよすぎるセックスをしてくれるのが、嬉しくて大好きなの。
ありていに言えば、頻度が増せば増すほど、抱かれれば抱かれるほどその想いの強さを知って興奮してしまうから、いっぱいしてくれて構わないし、むしろそうしてほしいの。常軌を逸するくらい愛されて求められてる感じが、たまらないの。

彼女に抱かれるたび『……ああ、ミネルヴァには、こういう激しい一面があるのね。それを隠そうとする心が植物の彼女に強く出て、いけない事だと封じ込めようとする心が石の彼女に定着して。抑えきれずにぶつけてくれる情動が液体の彼女に残ったのね』なんて思って、四人への理解が深まっていく事が幸せなの。
そして、そう思った時『じゃあ、全部受け止めたい』って願う事は、自然な事だと思わない？
彼女の事が、好きなんだもの……。

彼女の、いつでもわたしを感じたがって、十割肌を密着させたがって。
どこでする時だって素肌に触れたがって、絶対裸にしたがるところが愛おしくて可愛い

の。
庭でもそれをするのは……困るけど。
外で裸にされると、そのままなすすべもなく最後までされると、いつもより気持ちいいのはもう否定しない。
とにかく動物的な格好でしたがって、昼、机に上半身だけうつ伏せにされた状態で後ろからとか。
夜、寝ようと思ったら『時間があるようだ』と捉えられて腰つかまれて。ベッドに押し付けられて四つん這いでとか。
そういういかにも、欲望をぶつけられてるって感じのセックスが気持ちいいの。
乱暴そうで服従を強いるような体位と、丹念で甘い触れ方の落差が大好きなの。
いつまでだってしてほしいし、そういうのが好きだってばれてからは、彼女なりに毎回趣向を凝らしてくるのが、可愛くて毎日楽しみなの。
自分の持ってるもの全部くれようとするみたいにキスされながら、延々中いじめらるのが大好きなの。経口摂取ならまだしも、その、子宮に注いでも栄養吸収率は凄く悪いってわかってるくせに、人間の行為を模すみたいに。というか『他のミネルヴァにはできない事も自分にはできる』って誇示するみたいに。
こぼれるくらい、あの温かくて白いものを注がれる瞬間が幸せなの。
あまりに頻度が激しいから、このところは栄養密度も粘性も落ちてしまって、すっかり

さらさらした質感になっている事にまで、興奮してるの。

……あぁ、長くなってしまったわ。どうかお許しくださるかしら。

本当はこの生活の事を、誰かに話したい。

というか本来なら人間のミネルヴァ本人ともっと話し合うべきなのにできなくて、当然、他人にはもっと言えないものだから。というか言う機会も言う相手もいないものだから。

もうずっと一人で悶々とするばかりで、すっかり参ってしまっているの。

いくら好きだからと言って、心から愛しているからと言って。

毎日交わるばかりの日々を過ごして、たった二週間で、自分が信じられない程ふしだらな女になってしまった事を自覚している。

――でもわたし、今幸せなの。

今はこの恋に溺れていたいの。

ただ、一人の女性として扱われて。明日の事も忘れて、ただ刹那的に。愛されている実感を貪るのが、今の生きる希望なの……。

●正面　５０センチ

「【小さく、ぼそっと。

聞き取りにくいほど小さめに。

思わず、不安が漏れる。
『だからこそ、やっぱりここは貴方にはふさわしくないのかもしれない』と言いかけるが、やめる。それを口にしてしまう事は、ますますミネルヴァの不安を広げる事になるので】
……だからこそ、やっぱり、ここは貴方には……」

〈主人公〉
「……あら？
どこか、間違えている所があったかしら……」

……こうして、誰に対してかもわからない懺悔を続けていると。
ミネルヴァがふと不思議な事を言い、そのくせ途中でやめて口ごもった。
瞬間、主人公は不安になる。
いやらしくも甘美な頭の中のもやもやは消え去り、教師から指摘を受けた生徒のようにおろおろしてしまう。
これでも『セックスばかりしている』と思われないように、自分なりに努力をしたつもりだった。
それでもどこか気が緩んでいて、何か間違いでもしていたのだろうか。

主人公は思わず自分で自分を抱くしぐさをすると、そのままミネルヴァの言葉を待った。

●正面　５０センチ

「【ハッと気づいたように。
穏やかに優しく取り繕う。
このままでは、主人公を不安にさせてしまうと気づいたので】
……あ、いえ。
こちらの手順が間違っていると言った訳ではないの。
【少し間をあけてから。
少し悩んだが、思い切って切り出してみる事にする】
……でも」

〈主人公〉
「うん？」

だが、『なんらかのミスをした』という解釈は杞憂のようだ。
一度はそれにほっとするものの、ミネルヴァの顔は少しも晴れず、主人公はまた怖くなる。

その歯切れの悪さはまるで、以前から投げかけてみたくて、でも、ずっとできずにいた事でもあるかのようだ。
主人公はたじろいだ。
ミネルヴァが抱えている疑問。
それは主人公にとって、よいものであるとはとても思えなかったからだ。

●正面　５０センチ
「【少し間をあけてから。
おずおずと切り出しつつも、とても真剣に。
意を決したように、ワントーン真剣な声になって尋ねる。
ミネルヴァとしては、これはどうしても質問しておきたい事だったので。
※『急に、いきなり真剣な口調になった』という印象にならないように、ナチュラルな移行をお願いします※】
……もし。
もし、今からでも。本来貴方が歩むべき道に戻れるのなら。
貴方はそうしたいと思う？」

〈主人公〉

「……えっと。それは。
それは……どういった意味で、おっしゃっているのかしら」
だから、唐突にそう聞かれた時、主人公は身をこわばらせた。
確かにミネルヴァは唐突な女性だ。
こんな風に何の前触れもなく突然、主人公の心の核をつくような事を言って驚かせて、困らせる。そういう女性だ。
でもこの問いかけは、今までのそれとは明らかに違う。
これは、主人公の嗜好とかこれまでの生活の仕方などといった、過去に関する事ではなく、未来に対する質問だ。
そして……あまりにも答えにくく、向き合いたくない質問でもあった。

●正面　５０センチ
「【少し間をあけてから。
おずおずと切り出しつつも、とても真剣に。
『主人公が、もしかすると歩めたかもしれない人生』について述べる。
ミネルヴァはこちらの人生こそが、主人公にふさわしい物だったのではないかと思い始めているので】

たとえば、国研をお辞めにならずに。当初の将来設計通りに働いて。
七月には予定通り、魔法薬学の試験を受ける。
【少し間をあけてから。
さらにワントーン真剣な声で、熱っぽくなって尋ねる。
ミネルヴァにとって、これは非常に重要な質問なので。
もし主人公が『はい』と言ったのなら、ミネルヴァは全力で主人公をそちらの道へ戻したい、その手助けがしたいと思っているので】
そんな人生があれば、今からでも戻りたいと思う？
そんな風に、本来の夢を取り戻したいと思う事はない？」

〈主人公〉
「……」

主人公が戸惑い、目を泳がせても、ミネルヴァは視線をそらさなかった。
それどころかますますこちらを深く覗き込み、主人公の答えを待っているように見える。
それくらい彼女は、今、真剣な気持ちで聞いているのだ。
それでも主人公は、声が出ない。
なぜなら、ミネルヴァの言葉に沢山の思いを巡らせ、様々な言葉が心をよぎっても――

……。

それらのどれを口にしたところで、ミネルヴァを失望させるとわかっていたからだ。

〈主人公〉

「……ごめんなさい」

だから主人公は、誤魔化す道を選んだ。

本当は、

『急に、何をおっしゃるの？』

『……もちろん、戻りたい気持ちがないわけじゃないけれど……』

『でも、『戻りたい』と思う事は』

『あなたが『本来の夢』と呼んだものに未練があると認める事は』

『あなたがくれた幸せを、否定するのと同じ事ではないかしら？』

『そんな事、するはずがないじゃない』

『……わたしはあなたの事が、好きなんだから……』

『だから、わたしは言わない』

『答えない』

『今は考えたくない』
『今のこの暮らしこそが最良で、最善で』
『他の道など、最初から存在しなかったのだと思って生きていきたい』
『時折生じる迷いは、あなたとの日々で塗りつぶして、忘れたい』
『忘れさせてほしいの』
『先の事など、今は考えたくない』
『考えたくもないの』
『今すぐにそうしてよ』
『いつもそうするみたいに、突然キスして。今すぐこんな話から、わたしを開放してよ』
『どうして今日に限って。そうして下さらないの……？』

そう思っていても。
これらの気持ちを打ち明けた所で、ミネルヴァが『解放してくれる』とは、とても思えなかったからだ。

〈主人公〉
「……ありがとう。あなたが心配して下さるのは、とても嬉しいわ。
けれど、それはもう、考えても仕方のない事だと思うの。

あなたはわたしをとても評価して下さるけど……わたしは基本的に、とても感情的で、怒りっぽい人間で。
国研がああいう場所だった以上、いずれ問題を起こして。
長くはいられなかったと思うし。
また、わたしがそういう人間である以上、あなたの言う『当初の将来設計』は、不相応なものだったと考えているわ。
それに魔法薬学試験の方は、元々準備期間からして足りなくて、難しい話だった。
推薦者以前の問題なのよ。
だからね。わたしは今、あなたに雇っていただけている事が本当にありがたくて。
『これでよかった』『毎日、とても幸せだ』と思っているの。
……ここの生活は楽しいし、新たな発見がたくさんで、とても充実してる。
わたしにはもったいないくらいだわ。
だから、何も不満なんてない。わたしは幸せよ」

●正面　５０センチ
「【少しうろたえ、ショックを受けたような声で。
主人公の言葉にとても納得しきれず、食い下がりたいので。
ミネルヴァは『今の暮らしで幸せ』と言ってくれた事自体にはとても喜びを感じ、ほっ

としている。
ミネルヴァは主人公の事が大好きだし『他の三人の自分も、そこまで主人公さんに迷惑をかけていないのかもしれない』と思えたので。
だがその『今の暮らし』は本当に主人公にふさわしいものなのかと言うと、やはり疑問が残る。
主人公と自分の今の関係は、とことん悪意を持った見方をすれば『優秀だが働き口が見つからず、これ以上友人の世話にもなりたくない女性を、魔女がお金に物を言わせて引き取った。そして本来の力をまともに発揮させる場も与えず、小間使いもできる性奴隷にした』と表現されても仕方がないと思っているので】
……そう、なの？
貴方は、今の暮らしで幸せだと？」

〈主人公〉
「……そうよ。
あの時わたしをお救い下さって、本当にありがとう」

……その、代わりに。
主人公は困ったように微笑んで見せて。

〈主人公〉
「……それに、ここへ来て、痛いほど思い知ったわ。
わたしは結局、魔法薬師としてたいした才能なんてなかったみたい。
今も、あなたのなさる事についていくのが精いっぱい。
情けないけれど……ここでのお仕事も、あなたの仰る事も……全部理解できているかと言ったら、まったくそうではないんだもの」

●正面　５０センチ
「【※息づかいのみ※　で表現する。
少しショックを受けたように息をのむ。
主人公が、似合わない程の自虐的な発言をしたので】
……っ」

らしくないほどの自虐をして、ミネルヴァに慰めてもらうのを待った。

〈主人公〉
「つまり……わたしのピークは、学生時代で過ぎてしまっていたって事よね。

今思えば、大きな夢を持つ方が間違いだったと思うわ。
そんな、もはや終わった人のようなわたしを評価して下さって、本当にありがとう」

そうすれば、ミネルヴァはこんな話をやめて、とびきり優しい言葉をかけてくれて。
そのまま、いつものように抱いてくれるかもしれない。
そうしてこの、ミネルヴァとの恋から視線を外した途端、ただただ惨めで希望のないものになるこの人生を、忘れさせてくれるかもしれない。
そう考えたのだ。

●正面　５０センチ
「【※話すスピードは変えずに※
悲しそうに、何とか自分の意見を口にする。
ミネルヴァなりに反論し、主人公を励ましたいので。
だが、そうした経験がミネルヴァにはほとんどない。
なのでうまくいかず、言葉が思うように続けられなくなってしまう。
なので『今からだって、きっと沢山の未来をつかめるはずよ』などという漠然とした励ましをしようとするが、主人公にさえぎられる】
おかしな事を仰らないで。

貴方は『終わった人』などではないわ。
今からだって、きっと沢山の――……」

〈主人公〉
「……ごめんなさい！」

だが、ミネルヴァはそうしてはくれない。
つくづく人の感情の機微に疎くて、平気で痛いところを突く女性だ。
その上まるで子どもみたいに自分の意見に固執して、なおも食い下がって来る。
そのまっすぐな言葉に、瞳に、主人公は耐えられない。
気付くと主人公は、これまで出した事もないくらいの大声を出して、無理やり話を遮っていた。
ミネルヴァのような『夢を叶えて大成した人間』に、自分の気持ちなどわかるものか。
そう思ったからだ。

●正面　５０センチ
「【言葉を遮られ、少し傷ついたような声で。
まさか、主人公がそんな事をするとは思わなかったので。

ミネルヴァにとって、主人公はいつでも自分の話を最後まで優しく聞いて、温かく受け止めてくれる女性だったので。
ミネルヴァは、そんな彼女に話を打ち切られた事がとてもショックであるとともに『主人公さんにとって、この話題はそれほどまでに『したくないもの』なの？』と実感し、ますます悲しくなったので】
……あ」

〈主人公〉
「ごめんなさい……この話はもう、やめましょう」

なんとかそう告げた時、主人公の声は震えていた。
成功者と落伍者。
天才と凡人。
明日に希望があるものと、そうではないもの。
そんな二元論に区切られて、自分たちがあまりにも違う存在だと思い知らされ、泣きたくなったからだ。
……まったく、ミネルヴァは酷い事をする。
つい数時間前、液体の彼女がそうしたみたいに。未来の話などせず、ただ刹那的に。

どこまでも甘く許し合って抱き合っていれば。
自分たちはまるで何の問題もない、ただの仲睦まじい恋人ごっこができるのに。
溶け合って一つになった錯覚に陥って、強すぎる快楽に酔って。
現実から目をそらして、幸福に溺れる事ができるのに。
それなのに。どうしてミネルヴァはそれを自ら壊し、険悪な雰囲気になりたがるのだろう？
この空気に主人公はもう耐えられなかった。
一刻も早く逃げ出し、また他の……『別の彼女』に慰めてもらいたい。
ただ優しくしてもらって、気絶するように眠って。目を覚ませば、また愛されるばかりの一日が始まる。
そんな世界に戻りたい。
そう願うあまり、主人公はもはや、ミネルヴァの顔をまともに見る事すらできなくなっていた。
〈主人公〉
「この件は、わたし自身心の整理がついていなくて、うまく話せそうもないの。
だから……またの機会にして頂けるかしら」

●正面　５０センチ
「【とても気まずそうに。
動揺した様子で。
『主人公に拒絶された事が怖くて、うまく言葉が出なくなっている』『ただ従うしかなくなっている』という感じで。
かつてないほど『自分らしくない反応』に、ミネルヴァ自身戸惑っている感じで】
……うん。
わかったわ。
【優しく、だが、悲しげに頷く。
主人公の意向に従い、この話を打ち切る。
主人公に悲しい顔をさせてしまった事も申し訳ないし、答えを得られなかった事は悲しい。
そしてやはり、これまで一度もなかった『主人公に最後まで話を聞いてもらえず、話を打ち切られた』という事実が、自分でも想像しえないほどにショックだったので】
……そうね。
この話は、ここでおしまいにしましょうか。
おかしな事を聞いて御免なさいね」

力なく主人公が頼み込むと、ミネルヴァがようやく頷いた。
これ以上この話を続けても、発展的なやりとりは望めないと、やっと理解してくれたようだ。

〈主人公〉
「わたしこそ、急に大きな声を出してしまってごめんなさい……。
……そもそも、いきなり来た事自体、よくなかったわね。
お暇するわ。お忙しい中、わたしの研究を見てくれてありがとう」

そんなミネルヴァに主人公が今すべき事は、『では』と言ってすぐに去る事だ。
それが一番時間を浪費しないし、お互いに傷を広げる事もない。
そもそも主人公自身が今『別のミネルヴァに会いたい』と思っているのだから、少しでも早くそうすべきだ。
そうとわかっているのに、主人公はなぜかそれができなかった。
自分から話を打ち切っておいて、言葉でもこう言っておいて。
人間のミネルヴァ自身に優しく気遣ってもらい、ほつれた関係を修繕してもらう事。
そんなあさましい望みを、まだ抱いていたからだ。

●正面　５０センチ
「【まだ少し悲しそうに。
だが、少しでも明るい声にして、場の雰囲気を戻そうとして。
『主人公さんが謝る必要は全くない。いけない質問をしたのは私なのだから』と思っているので】
……ううん。
とんでもないわ。貴方のお願いなら、いつでも聞きますからね。
また何かをお作りになったら、すぐに見せて頂戴ね」

〈主人公〉
「ありがとう。では……」

●正面　５０センチ
「【穏やかだが、勇気を出して切り出す。
もともとこの件について話したかったのもあるし、これを知らせれば、主人公の気持ちが明るくなるかもしれないと思ったので】
……後（あと）ね。
実は、私からもお伝えしたい事があるの」

〈主人公〉
「え？」

だからこれを聞いた時、主人公の声は、みっともないほど期待で上ずっていた。

〈主人公〉
「な、何かしら……？」

こんな声、ベッドでどんなおねだりをする時のそれよりも、ずっとずっとひどい。
一番大切な人にここまで気を遣わせて、なおもまだその厚意に甘えようとする、恥知らずの図々しい女。
主人公は、自分がいよいよそんなものになり下がったという事を実感して。それでも『そんなもの』であるのをやめられないまま、ミネルヴァを見上げた。

●正面　５０センチ
「【穏やかに優しく。
主人公が何だか不安そうにしているので、それを少しでも早く払拭するべく、具体的な

内容の話に移る】

ふふ。実はね、貴方にプレゼントをご用意したの」

〈主人公〉

「……わたしに？」

ＳＥ７　ミネルヴァがカギを見せる音

【最初から最後まで流す】

ミネルヴァ『正面５０センチ』から『正面３０センチ』の距離まで近づく。

●正面　３０センチ

「【穏やかに優しく。

少し心が落ち着いてきたので。

主人公の顔が明るくなった事が、とても嬉しいので。

それと共に『やはり主人公さんはこのままではいけない。私が現状を変え、助けて差し上げなくてはいけない』という気持ちが強まる。

だが、まずはプレゼントの内容と、来週の予定について述べる。

まだ主人公に真の思惑を知られるわけにはいかないので】
そう。貴方に。
三日後……学会前日の二十八日からはアカデミーの近くに泊まるから、貴方はお留守番でしょう？
そのお詫び……と言っては何（なん）なのだけれど。
以前私が研究に使っていて、今は街の倉庫に入れている物を、貴方にお譲りしようと思っているの」

〈主人公〉
「えっ……！
何かしら。もしかして実験器具とか……参考書とか？」

――この、わざとらしく驚いて見せる己を見たら。
過去のすべての自分があきれ『何をしているのだ』『そこまで堕ちたのか』と困惑し、今の主人公を非難した事だろう。
現実から目をそらし、想い人に媚びてやり過ごそうとする。
そんな事、これまでの人生で一度もした事がないからだ。
でも、事実主人公はそうしている。

堕ちたからだ。
『やめたい』『逃げたい』『どうかこの現実から逃がしてほしい』。
今の主人公に、それ以外の考えなどない。
それができるのであれば、どんなに自分らしさを失ってもかまわない。この場を切り抜けられるのなら、己がずっと嫌悪していた、浅はかでみっともない女になってもかまわない。
もはや、そう思うようにすらなっていたからだ。

●正面　３０センチ
「【穏やかに優しく。
微笑んで、プレゼントの内容を伏せる。
以前のミネルヴァであれば『いいえ、違うわ、〇〇よ』と、正直にプレゼントの内容を話してしまっていた事だろう。
そうしないのは、主人公との交流で精神的に成長したからであり、また、嘘や秘密を覚えたからである。
しかし、今は秘密を抱えているものの、嘘は言っていない。
心から、主人公の役に立つと思えるものをプレゼントするつもりでいる。
……それが『主人公が喜んでくれるもの』であるかは自信がないが】

……ふふ。詳しくは言えないけど……。
きっと貴方の役に立って、あなたが喜んでくれる物だと思ってる」

〈主人公〉
「……？
いい、の……？　わたしが受け取ってしまって」

そんな自分が、あまりにも『自分らしさを放棄している』とわかっていても。
それでも主人公は、醜くある事をやめられなかった。
将来について思い悩み、明るい展望の見えないところにいるからと言って、自暴自棄になり。
自分の頭で判断する事を捨て、ただ注がれる愛と快楽に溺れる女になった。
それは『ただ一回質問を避けただけで、何を大げさな事を』と言われるような事なのかもしれない。
だが主人公は『何も知らないまま流されるだけの弱り切った女の子』になる事はだけは嫌だと、そう思って今日まで生きてきたはずだ。
なのに主人公は捨てた。
二度と現実を突きつけられないように、自分で考える事をやめたのだ。

●正面　３０センチ

「【穏やかに優しく。

微笑んで、プレゼントを受け取ってほしい旨を改めて伝える。

また、それを受け取る事で、主人公が自分の将来について、前向きな展望を抱いてほしいと、心から願いながら言う。

今の主人公は、ミネルヴァからしても、とても見ていられない。

ミネルヴァ自身、今もかなり戸惑っており『主人公さんはこのような事を仰る方ではなかったはずだわ。どうして今日に限って、このような、実態とは違う自己評価をなさるのかしら』と、強い不安を感じている。

だがミネルヴァはこれを『主人公はミネルヴァに慰めて、優しくしてほしいから自虐している』と解釈できない。

以前と同じである。

ミネルヴァは『事実と異なる発言をする主人公を、不思議に思う事』『誤った解釈を正すために、事実と異なる点について否定する事』以外の発想、行動ができない。

その『否定する事』すら封じられた今、どうにか他の方法で主人公に正しい自己評価を促す事しかできないのである】

ええ。ぜひ、貴方に受け取って欲しいの。

だから……私が戻るまでは、貴方はそれらを使って、ご自身の研究を進めて。
今後について、前向きに考える時間にして頂きたいの。
……そうしてくれたら、私も嬉しいから」

〈主人公〉
「そう、なのね。わたしのために、用意して下さったのね。
……受け取りに行くのが、とても楽しみだわ。
ありがとう、ミネルヴァ……！」

――なぜ、主人公が逃げたのか。
こんな上っ面だけの発言をして、せっかくの贈り物をまともに喜ぶ事すらできずに、向き合う事を拒んだのか。
それは『ミネルヴァから愛されている』という実感が欲しかったからだ。
どんなに、どれだけ自分で自分が嫌になるような事をしても。ご機嫌を取ってもらい、優しくこの場をとりなしてもらえる。
自分はそういう存在なのだと実感したかったからだ。
すべてを失い、『本来の夢』になど帰れるはずもない自分を、唯一支えてくれるもの。
それはミネルヴァだけだ。

ミネルヴァだけが、今の自分を価値あるものにしてくれる。
今の主人公は、そう思っていたからだ。

SE8　ミネルヴァがカギを見せる音2
【最初から最後まで流す】

●正面　30センチ
「【穏やかに優しく。
主人公に鍵を手渡し、当日どのようにすればよいかを伝え始める。
主人公に『なぜ問題から逃げてしまうの』と思いながら、ミネルヴァはミネルヴァで、この現状から逃げ始めているので。
こんな時、本来のミネルヴァならひるまずに話を戻そうとするのに、今だけはできずにいる。
それは、まったくミネルヴァらしくない行為である。
ミネルヴァ自身そう自覚しながら、楽しくて気分のいい話に逃げようとしている。
それは、主人公の事が怖いからだ。
主人公の顔が曇ったり、拒絶されたりするのが怖いからである】
ふふ。これが鍵よ。

この住所に行って、受付の方にお渡しして。
楽しみにしていてね。
【ここで、ふと思い出したように。
優しく、受取時の注意事項について述べる。
『自分は逃げている』『問題に向き合わず先送りにしている』と自覚しながら、当日のスケジュールについて提案する。
その上、これは嘘が混じっている。
実際には保管期限にはもっと余裕があり、この通りのスケジュールで受け取る必要はない。
しかしそうするのは、直前まで自分も同行するのは、プレゼントを渡すだけではない、別の思惑があるからである】
……あぁ、でもね、恥ずかしいから……できればぎりぎりに取りに行って欲しいの。
私も、直前まで準備するつもりだし。
保管期限は、二十八日の十三時。一時ごろまでだから。
二十八日、十二時前位に出る私と……街までは一緒に行って。
貴方はそのまま倉庫へ行くのはどうかしら」
そんな主人公に届けられたのは、妙に具体的なスケジュールだ。

普段の主人公なら『ミネルヴァにしては周到すぎる』『何かあるのではないか』と、きっと見抜けた事だろう。
だが、今はできない。
この場をしのぎ、最大限優しくしてもらって。少しでも良い雰囲気に戻してから去る事。
主人公の頭はその事で占められていて、この違和感にまるで気づけないのだ。

〈主人公〉
「……いいわね。
ありがとう……！　今から待ちきれないわ。ぜひ、そうしましょう。
あちらの街へ行くのは久しぶりなのでしょう？
当日は駅までお送りするわね。
不安でしょうから、ついていくわ。
あと……。
あの、その」

●正面　３０センチ
「【穏やかに優しく続きを促す。
正直な所、まだまるで心は晴れない。

それでもミネルヴァは、主人公が笑顔に戻ってくれた事が本当に嬉しいので。
正直な所、当日、プレゼントを実際に見た主人公が、どのような反応を示すのか、ミネルヴァにはわからない。
本当は今そのあたりを測りたかったが、うまくいかなかったので。
しかし、どう転ぶにしても、ミネルヴァは自分のプレゼントによって、主人公が自身の将来を見つめてほしいと思っている。
主人公に対して『今のままではいけない』と思っているので】
うん？」

SE9　主人公の足音3
【最初から最後まで流す】

主人公が近づいた事で、ミネルヴァ『正面30センチ』から『正面0センチ』の距離まで近づく。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
主人公からキスされる、受け身のキス】

ちゅ」

〈主人公〉
「……ありがとう。大好きよ」

そして主人公は、女である事を利用した。
いつまでもそうしてくれない事に焦れて、自分からキスする事で、無理やり甘い雰囲気に持ち込んだ。
……いや、『女』。
その表現すら、もはや正確ではない。
たとえ主人公が違う性を自認していたとしても、主人公は同じ事をして、己の性と、ミネルヴァとの関係を利用して、この甘え腐った行為を選んだ事だろう。
主人公にとって、ミネルヴァとのキスは特別なものだ。
初めてその唇に触れた時から、たまらなくどきどきして。重ねた全てが、美しく甘美な思い出になるほど、すべてのキスが大切で、宝物のようなひとときのはずだった。
それなのに主人公は今、この場をごまかすためだけのキスをした。
こんなにも素晴らしいものを汚すほど、主人公は動揺していた。
そのくらい『これから』について触れられる事は、主人公にとって恐ろしい事だったの

だ。

●正面　０センチ
「【少し驚いて。
嬉しそうに。
だが、内心はどこか複雑で、素直に喜びきれずにいる。
先程の一件が、まだ心に引っかかっているので】
……まぁ……」

ＳＥ１０　ミネルヴァが主人公を抱き寄せる音
【最初から最後まで流す】

●正面　０センチ
「【少し困ったように笑う。
本当は、先程の話題を追及したい。
主人公の今後について、もっときちんと話したい。
でも、できず、主人公とのキスに溺れて逃げる。
主人公はこれを『何も聞かずにいてくれて優しい』と解釈するが、実際それは半分しか

正しくない。
実際はミネルヴァもまた、恐れていたからだ。
これ以上聞きたい事を聞いて、主人公に嫌われてしまったら。その時生きていけないのは自分の方であるとわかっているので。
今もすでに、人間のミネルヴァを介して様子をうかがっている他の自分たちが……植物の自分が心配し、石の自分が不安を感じ、液体の自分が『どうしてこんな事を』と、人間の自分を非難しているのを感じるので】
ふふっ。
【※１０回※　キスする。
甘々で優しい、だが、目の前の問題から逃げるキス】
ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅっ❤
んっふ……ちゅ❤
れんろ……ちゅっ❤
ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅぱぁっ❤」

そんな主人公に、ミネルヴァは優しかった。
本当はもっと聞きたい事があるだろうに、ミネルヴァとは、本来そういう女性だろうに。
何も聞かず、ただ愚かな主人公を、ただ受け入れてくれた。

主人公はそれにほっとして、ただキスされて背中に腕を回して。胸をちくりと刺した違和感を無視する。

……なんだか、変。

なんだか、いつものミネルヴァじゃないみたい……。

確かにそう思ったのに、好きな人からキスされる喜びに溺れて。気づいていないふりをしたのだ。

〈主人公〉

「ぁ……」

ミネルヴァ『正面０センチ』から『正面１５センチ』の距離まで離れる。

●正面　１５センチ

「【穏やかに、嬉しそうに。

主人公が喜んでくれた事にお礼を言う。

自分自身は今、心から喜べるわけではない。

だが、主人公の気持ちが明るくなったらしい事は嬉しいので。
ミネルヴァは今、自分の中にある疑問や不安を意図的に無視している。
主人公と同じように、今の『かりそめのよい雰囲気』を維持するために、演技をしている】

ふふ、お返しよ。
そんなに喜んで頂けるなんて嬉しいわ。
私こそ、ありがとう。
【少し間をあけてから。
少し困ったように、からかうように。
わざと性的な話題を振る事で主人公を困らせ、退室させようとしているので。
今までのミネルヴァは、故意にこんな事をする事はなかった。
それなのに今は、このような話題の反らし方まで覚えてしまっている】
でも、そんな可愛いお声を出すのはいけないわ。
『そろそろ学会が迫っているから、人間の私とは絶対にセックスしない』と仰られたのは、貴方でしょう？
このままだと私、約束を破ってしまうかもしれないわ。
ただでさえ他の私ばかり貴方と交わっていて、羨ましくて仕方ないのに……」

〈主人公〉
「……ぁ……！」

言われて主人公は、慌てて身体を離す。
さっきまでそれを望んでいたくせに、またも芝居がかった調子で逃げると、こんな事を言う。

〈主人公〉
「……そうだったわね。いけない。いけないわよ……。
約束は、守らなくてはいけないものね。
そもそも、今日は早く眠らなくちゃ。
忙しい時こそ……生活習慣を崩してはならないわ。
あなたもどうか、そうなさってね」

しらじらしい。
何が『いけないわ』『早く眠らなくちゃ』だろう。
今だってそうして欲しいと思っているくせに、こんな事を言うミネルヴァにホッとしているくせに。

それでも主人公は演技を続けた。
この場から逃げるために。
これ以上の追及を、避けるために。

●正面　15センチ
「【穏やかに、嬉しそうに。
主人公がいとおしくて仕方ないという感じで。
しかし内心では、うまく主人公を退室させられそうな事に安堵している。
このままこれ以上主人公といると、ミネルヴァはまた、同じ事を質問してしまいそうなので。
また、主人公もまた同じ気持ちだろう事を、薄々察している。
ミネルヴァはこんな形で、主人公の気持ちを『正しく読み取る』事が出来てしまう】
ふふ。そうね。今日は早く眠らなくっちゃね」

〈主人公〉
「……ええ。ぜひそうしてちょうだい。
これも、約束よ」

こうして主人公は『逃がしてもらう』事に成功した。
自然なそぶりを装いながら、実際はまたわざとらしく演技をして後ずさり、そのままドアへと近づいていこうとする。
先ほどは、あんなにも幸福な気持ちで握ったあのドアハンドルを、今度は退却したい一心でつかもうとしている。

ミネルヴァ、主人公が少し離れた事で、『正面１５センチ』から『正面３０センチ』の距離まで離れる。

●正面　３０センチ
「【穏やかにとても優しく。
母親が子どもにおやすみを言うように】
ええ。おやすみなさい。また明日」

〈主人公〉
「おやすみなさい。
部屋にいるから、何かあれば、いつでも気軽に呼んでちょうだいね。
どうか、無理はなさらないで」

●正面　３０センチ
「【穏やかにとても優しく。
だが、どこか淋しげに。
今夜はミネルヴァにとって初めて、主人公と心の距離を感じた夜になってしまったので】
……いい夢を」

その時主人公が『部屋にいるから』と、わざわざ言ったのは。
部屋まで逃げ帰った後。
待ち構えていたかのような液体の彼女に、また欲望のままに犯されたら……質問に答えられなかった事に対する『懲罰風セックス』なんて都合のよすぎるものができると思ったし。
心配そうにやって来た石の彼女に、ひとしきり慰めてもらって。そのお礼に口でとびきり奉仕すれば、四人全員のミネルヴァに謝罪した気分になれると考えて。
見かねた植物の彼女に、髪の毛から、爪先からぎゅっと抱きしめられて。まるで自慰を手伝ってもらうみたいな優しすぎる愛撫をされたら、少しはこの傷ついた自尊心が癒えるかもしれないと思ったからで。

――それから、もし。
もし、人間のミネルヴァが来てくれたのなら。
その時は、素直に謝る。
先の言葉にとても動揺した事、自分の未来が見えなくて怖くてたまらず、本当はミネルヴァに相談に乗ってほしいと思っている事を、正直に打ち明ける。
そう思ったからだ。

だけど、その夜は――……。
どれだけ待っても。主人公の部屋には、どのミネルヴァも訪れなかった。

SE11　主人公の足音4
【最初から最後まで流す】

SE12　主人公が扉を開ける音
【最初から最後まで流す】

SE13　主人公が扉を閉める音
【最初から最後まで流す】

ここでフェードアウトして終了。